

第3回持続可能な歩いて暮らせる新しいまちづくりセミナー

『粋なまちづくり～神楽坂での取り組み～』

開催日：平成19年3月16日14時～16時30分

会場：福島市 ホテル辰巳屋8階「瑞雲の間」

講演『粋なまちづくり～神楽坂での取り組み～』

講師：鈴木俊治氏（（有）ハーツ環境デザイン代表）

〔はじめに〕

神楽坂まちづくり憲章は、地元で平成6年に制定された。このまちづくり憲章は、これからのまちづくりを進めるための「基本的な考え方・理念」であり、言い換えると「人の気持ち」の集まり。

まちづくりで一番大事なことは、まちに対する気持ち、お互いの気持ちであり、神楽坂まちづくり憲章ではそこを大事にしており、みんなの気持ちを集めた内容となっている。

まちづくり憲章は五点で構成されている。一番目が「坂と石畳のみちを中心に、歩くひとにやさしいまちをつくります。」ということで、これが神楽坂の特徴を表している。また、本日のセミナーの趣旨でもある、どうやって快適に歩けるか、人が楽しく歩いて時間を過ごせるか、といったところにも通じる。

自分も所属しているNPO法人粋なまちづくり倶楽部では、新しい視点から基本的なライフスタイルを見直し、スローライフ、スローシティを楽しみましょう、日本のまちづくりに和のまち、粋なまちを取り戻しましょう、ということで活動している。本日のセミナーでは、主にNPO法人粋なまちづくり倶楽部の活動を紹介したい。

NPO法人粋なまちづくり倶楽部の取り組みの一つとして、街のコンシェルジェ活動（街の案内）を行っている。

〔神楽坂について〕

神楽坂という街についてだが、今年テレビドラマの舞台にもなったため、その影響でガイドブックを持って神楽坂を歩く人が増えてきている。これはいいこともあり、必ずしもそうでないこともある。

神楽坂は山手線のほぼ中央に位置している。街の生い立ちは、江戸城ができて、大名屋敷から江戸城への通勤路として神楽坂ができた。

そして、街を守るための多くのお寺ができ、その後、毘沙門天善国寺（毘沙門様）が江戸時代中期に移ってきて、縁日の道として親しまれるようになった。また、行元寺という大きなお寺（現在はマンションになってしまった。）があったが、ここを中心に江戸時代の岡場所（非公認の遊郭）があり、江戸時代に賑わっていた。

区画割りは今も非常によく残されている。神楽坂の街自体は第二次世界大戦ではほぼ全焼しており、今残っている古い建物も戦後に建てられたものがほとんどである。しかしながら、街割り、区画割りは江戸時代のものをかなり残している。外国人を案内する機会が多いが、これこそ私が思っていた東京の街だとよく言われる。

神楽坂通りの両側にいろいろな路地があり、兵庫横丁、かくれんぼ横丁、芸者新町など面白い名前が付いている。この辺りの路地は江戸時代以降の花柳界であり、今では石畳があり、黒い塀があり、手入れされた植木がある。街歩きを案内するときに案内するコースとなっている。江戸時代以降、夏目漱石、永井荷風など多くの文人が活躍した場所でもある。

いろいろな人がいる、というのが神楽坂のいい所である。神楽坂では、下駄履きの人もいれば、おしゃれをしている人もいる。お年寄りもいれば、高校生もいる、親子連れもいる。

神楽坂通りでは数年前、歩道の環境整備を行い、今ではケヤキのトンネルのような光景を見ることができる。

毘沙門天善国寺では、イベントや待ち合わせの場所に使われたりしている。神楽坂のシンボルとなっている。自分の事務所はこのお寺からすぐの所に構えている。

神楽坂には様々な路地がある。これらの路地は石畳と黒塀が特徴的である。石畳になったのは昭和30年代と歴史はそれほど古くない。4m未満の道路が多く、現行法規では建て替えができない。何かやろうとすると、道路を広げなさいと指導される。これがまちにとって、地域にとって本当にいいのかというのが問題になっている。

神楽坂はほとんどが私道で、地名のとおり、いろいろな坂が多い。車はほとんど通らない。東京の真ん中で路地が残っているのは軌跡に近い。一度壊してしまったら二度と再生することは出来ない。テレビでは映さないようにしているが、実は高層マンションが出来ており、建築中のものもある。景観上好ましくない。

まちづくりは、その場所ならではのもの、まちの特徴をいかに残していくかが大切だ。まちづくりは世の中を支配している、大量生産、大量消費、大量流通とは合わない。しかし、目先の効率性が優れた所が生き残り、また、社会的な仕組みがそれを後押ししている。

路地は車が入れない、救急車も通れないので危ないと言われるが、それは確かだが、物事の一面の見方でしかない。スプリンクラーなど、様々な技術で対応が可能だ。しかし、制度を乗り越えて課題を克服することは大変だ。

また、高齢者が安心して歩けるまち、バリアフリー、ユニバーサルデザインというが、階段がないからバリアフリーではない。地域の多くの方が、ここは車がないからゆっくり歩ける、いつでも休めると言っている。また狭い路地が張り巡らされているので、その日の気分、用事によってルートを変更することができ、まちを楽

しむことができる。広い道を作ればまちが良くなるかと言えば、どうもそうではないようだ。バリアフリー、ユニバーサルデザインは、そのまちのやり方、デザインがある。

花柳界は格調が高い料亭がある所もあるが、そういう所ばかりでもなく、庶民性があって、敷居が高くない所もある。いろいろな人がそれぞれ楽しめるまちである。

最近、路地に店が増えてきている。あまりけばけばしくない、路地空間に調和するような、まちに調和する光、色づかいをしている店はまちのマナーを守っており、まちに受け入れられるし、お客もそれを期待してまちに来ている。

祭りもあり、地域の人がいろいろな形で関わっている。

神楽坂は、歴史と文化が調和したまちであり、3,000人ぐらいが住んでいる。残念ながら減りつつあるものの、老舗の店も残っている。昔から住んでいて、こだわりを持ってまちに関わっている人が多い。

路地空間は人の生活空間であり、そこで商売する人の表玄関であるので、路地を使わせてもらうマナーというものがある。ガイドブック、旗を持った人が増えてきたが、まちのマナーを守らないと迷惑がかかる。

〔粋なまちづくりとは〕

NPO法人粋なまちづくり倶楽部ができて4、5年になる。自分は出来て1年ぐらいしてから参加した。

粋なまちとは何かとよく聞かれる。粋とは、ちょっとやせ我慢をするというのがわかりやすい。自らを律し、人のために働くということ。このことによって、まちのマナーが守られる。

粋なまちづくり倶楽部では、地域の歴史的、文化的な活動を定着させるための活動も行っている。

粋なまちづくり倶楽部ではどういう役割が求められているのか。自分達は、新参者であり、よそ者である。50年いてもそう言われるかもしれない。自分達が神楽坂の主役だとは思っていない。まちのサポーターであり、調整役であり、今までやっていなかったことに、出しゃばらず、臆せずに、取り組んでいる。もちろん、まちの流儀を重んじなければならないが、それだけではなく、専門家(建築、都市計画等)が多く入っているNPOなので、正論も言いながら取り組んでいる。徐々にまちに浸透し、まちから求められる存在になってきている。

神楽坂の良いものを活かし、それを表に出し、必要なものは補っていく。神楽坂の地域資源は、路地であり、路地裏の古い建物である。まだまだ力不足で、粋なまちづくり倶楽部では建物を買い取り、保全するということは出来ていないが、ゆくゆくはそのような活動もやっていきたい。

なぜ古い物を残すのかということだが、今のまち先人が知恵を出しあい、積み上げてまちを作ってきたし、その時々合理的なものを作ってきた。それを一時代

で無くしてはいけない。今の時代に出来ることは、少し手を加えて、次の世代に財産として残していくことではないか。

〔今後の粋なまちづくり倶楽部の課題（私見）〕

継続的な活動を行うためには、人的体制、組織、そして財源が必要だ。多様な活動をしていく上で、専任者が必要であり、安定した活動をするための体制、拠点が必要だ。現在は一部の人に大きな負荷がかかっており、人件費がほとんど出でおらず、持続可能性が小さい。社会人として、それなりの収入がないと継続していけない。

粋な街づくり倶楽部の現在の財源は、まちづくり委託調査が大きく、その他の収入としてはイベント収入、視察受入費、メンバー会費など。

まちの人氣がここ10年で高まっている。そうなってくると、開発圧力が高まり、高層マンションの建設が危惧される。また、現行制度（建築制度等）では路地を残すことは難しく、今の建物の建て替えすら出来ない。関係機関と連携しながら、神楽坂の風情を未来に残すように努力が必要だ。

路地が無くなり、高層マンションだけになってしまえば、神楽坂に人は来なくなってしまう。ディベロッパーは高層マンションを造った後は逃げていってしまう。まちに何の関わりのないものの、ただ乗り、やり逃げが横行している。現行法制度ではなんら問題にならないが、まちのモラル、文化を残すためには、こういったことを野放しにしてはならない。

まちの中の人もいろいろな人がいる。これだけ経済活動が盛んな東京で高層マンションを建設して何が悪い、という人もいれば、古くから住んでいる人、新しく来た人もいる。こういった中で共通した意識をつくっていくのは、個人の財産にも関わる話なので難しい。

ボランティア説明会を2ヶ月に1度開催している。NPOではボランティアの力が大切である。

いろいろな活動をやりながら考えている。街歩きの案内（街のコンシェルジェ）は年に数回定期的で開催してきたが、これからは毎週開催することも考えている。

メンバーが浴衣を着て街を案内する「浴衣でコンシェルジェ」は、夏祭りのイベントとして3年前の夏から始まった。なお、浴衣で参加したお客さんには記念写真を撮るサービスをしている。1時間から1時間半案内して一人千円をいただいているが参加者から高いと言われたことはない。

また、まちの粋を探そう「路地の粋さがし」、まちを歩いてカルタをつくり活動もしている。その他「路地案内板」、まちを知る「神楽坂まちづくり住まいづくり塾」、伝統芸能とワークショップ「能のワークショップ」「能と花のワークショップ」、定期的で開催している「神楽坂毘沙門寄席」、「粋まち自主ゼミナール」、講演会、シンポジウム、ボランティア会議等を開催している。

さらに、米国で歴史的建築を活かしたまちづくりをしているメインストリートプログラムを招き、日米NPO交流事業を開催した。

古い料亭は経営が成り立たなくなり、高層マンションが建築されて、まちが壊れてきている。チェーン店の看板についても規制が難しい。マンション問題については、高さ制限をするために地区計画を作ろうとしているが、行政側は規制型の地区計画を作ることについて腰が重いようだ。まちに何が必要かと考え、動くことができる行政職員が出てきて欲しい。神楽坂で建築しようとしているマンションについては建築審査会に不服申し立てをしている。

まちのルールと景観を考えるワークショップ「看板ワークショップ」等を通して、神楽坂のまちの景観をどうするか検討しているが、NPOだけでやるというのは大変だ。行政機関からの支援が必要だ。

粋なまちづくり倶楽部の主要メンバーも参加している神楽坂まち飛びフェスタ実行委員会が主催している「まち飛びフェスタ」では、まちをキャンバスに見立て、お絵かきを楽しむということもしている。

神楽坂はブームになっているが、いろいろな問題が出てきている。表面的には華やかに見えても、裏ではまちを壊すようなことが合法的に行われており、これを食い止める手立てがない、というのが実情である。

神楽坂とは条件が違うが、それぞれの地域においても、自分の地域の良いものを活かしたまちづくりを進めて欲しい。

パネルディスカッション『新しいまちづくりについて』

コーディネーター：鈴木俊治氏

パネリスト：小野寺裕子氏（アネッサクラブ代表）

本田政博氏（福島商工会議所中小企業振興部長）

松崎康弘氏（平サロン倶楽部事務局長）

【コーディネーター】

「不都合な真実」という映画が最近話題になった。これは、いかに地球の温暖化が深刻かということを紹介した映画で、アカデミー賞で賞を取った。これを見ると人間活動が地球環境に大きな影響を与えているのはほぼ間違いない。特にエネルギーや資源の大量消費が原因になっている。地球が危機に瀕しているということを実感する映画だ。

そこで我々は何をしているのかと言えば、これまで通りの生活をしている。車で大型スーパーに買い物に行く。地球環境は大事と言いながら、なかなか行動に移せないというのが現実的なところではないだろうか。

短期的な経済効率を追求するということになると、今の社会経済潮流の流れに乗っていくということになる。個性的なまちづくりを進めようとか、歴史的なものを大事に残そう、車になるべく乗らないで公共交通を使おう、歩いて暮らそうというのは今の社会の潮流に反している。そうしなければいけないという警鐘を多くの人が鳴らしているが、それをどうやって出来るところから変えていくかというのが神楽坂での取組みであり、本日のパネリストから紹介してもらう中心市街地での取組みではないだろうか。

今までの流れに乗っていない新しい取組みなので、いろいろな苦しみ、困難さを伴うと思われる。どのようなまちづくりの取組みをしているのか、苦労している点も含めて説明いただきたい。

【パネリスト】

長く中心市街地活性化に関する取組みに関わってきた。当初、商工会議所が中心市街地の話をする時は、中心商店街という言葉を使っていた。まちづくりというよりは商店街の活性化ということを中心に商工会議所は取り組んできた。今は中心市街地という言葉に変わり、まちづくりという言葉に変わってきており、商店街の振興だけではなくってきた。

かつては、商店街ごとに勉強会を行っており、平成3年頃から若手経営者を中心として、面的な中心市街地の活性化へ取り組むべきという機運が高まり、平成7年に第三セクター（株）福島まちづくりセンターが設立された。

（株）福島まちづくりセンターでは、20数名の商業者が1人100万円ずつ出資し、福島市から2,500万円、商工会議所も出資を得て、資本金6,000万の

会社が設立された。福島市のまちづくりの基盤となる主体が出来上がった。

今現在、さまざまな事業を進めているが、何とか黒字で運営できている。社員を抱えて運営している。この会社と商工会議所、商店街、行政と連携してまちづくりを進めている。

まちづくりセンターで当初に目指した事業というのはソフト事業である。ハード事業ではなく、ソフト事業を目指してきたというのがポイントであり、福島市では共通駐車券システムを平成7年度に開始し、現在年間100万枚が使われている。これが福島市のソフトのインフラ部分を作った。そしてもう一つはももりんポイントカードシステムの導入も行った。この二つの事業は街に来る人を増やすソフト事業である。

現在、車社会というのは間違いないが、車で来る人をいかにスムーズに街なかに誘導できるかということで駐車券システム、また、来てもらった人に共通のサービスを提供し、さらにリピーターを増やしていくというのがポイントカードであり、個店でない横断的なソフト事業を基盤にスタートしたのが特徴。

その他に、福島市の肝いりで始まった、街なかのイベント情報を一元的に管理して、それをカレンダーにして市民に年3回、1回3万部発行し、街に来る動機をつくった。

また、かつて福島でもミニバス40日間走らせ、高齢者を中心に街なかに来街者を増やす事業を行った。

その他の特徴的な事業としては、空き店舗対策として、大型店のOBを活用し、リーシング活動やチャレンジショップの指導を実施している。ただし、中心市街地の商業マーケットは大変難しく、簡単にリーシングが成功するわけではない。また、今までは単に空き店舗を埋めるという発想しかなかったが、必要な業種を入れるという発想に変わってきている。ただし、それに伴うノウハウが十分でないという課題もある。年間5、6店舗のペースで空き店舗を埋めている。

拠点開発として、(株)福島まちづくりセンターでは、福島の南地区にラビィバレー一番丁を整備した。これは、都心居住者に対して生鮮品を中心とした商業を供給していこうという発想で整備した。これからは小さい拠点をセンターが中心となって整備していくということを考えている。

現在取り組んでいるものとして、福島市政100周年の記念事業として、花見山の25万人の観光客を街なかへ誘導するイベントを企画している。このイベントではテーマを花として、街なかを花で埋め尽くすことを考えている。そのために花見山の花や、桃の農家から花を持ってきてもらうことを考えている。

ターゲットについては、花見山の観光客の25万人から5万人と、市民から3万人の合計8万人を考えている。

徹底して福島のリソースを活用することも考えている。花や果物であるとか、福島に

は温泉が3つあるので、週替わりでそれぞれの源泉の足湯を楽しんでもらう。

今回のイベントは約1ヶ月間だが、参加40数団体のそれぞれに担当してもらうことを考えている。商店街、市民団体、高校生などがイベントに参加する予定になっている。

地域資源を活用し、花というテーマで、市民が手作りで参加し、イベントを継続的に実施するという、今までにない取組みを実施する。また、福島市の歴史も案内して歩くということもやっていきたい。今まで連携したイベントが出来なかったが、今回できたネットワークが、今後の中心市街地活性化に役立っていくと思う。

【パネリスト】

いわき市で今後必要だと感じていた内容がすでに福島市で取り込まれており、参考になった。

平サロン倶楽部では、まちに芸術文化の拠点づくり、青少年の活動の支援、歩いて暮らせるまちづくりの実現、という目標を掲げて活動を始めた。

2001年にTMOの空き店舗対策の一環として、平サロン倶楽部の活動拠点となる、街なか情報館ができた。

平サロン倶楽部では、コンサートや、いわきの文学を朗読で紹介している。これらの活動は今後も続く予定。

最初に実施した大きな事業は、日比野克彦氏をいわきに招き、タウンアートを実施した。商工会議所から大きな支援を受けた。

地域資源、地域にどんな資源、風習、お祭りが残っているか、若手の研究者に調査を依頼し、発表してもらうということもやっている。

理念の2の青少年の活動の支援については、青少年に賞を与えて、展覧会を実施する事業をやっており、受賞者の刺激になっているようだ。また、中高生が学校の垣根を越えて組織している120名のボランティアサークルの連絡先を平サロンが引き受けている。

理念3の歩いて暮らせるまちづくりに関して、街なか情報館は、地域の方にコーラスの練習場所や、まちの集会場的な役割として利用されている。

実際に歩くというのは別の意味をもっている。

平サロンはいわき市平の本町通りにあるが、この2軒隣の歴史的な建築物が数ヶ月前に壊された。また、釜屋という、いわきにとっての経済、文化拠点となっていた所が廃業になり、個人のオーナーに移った。その蔵をまちづくりに活かそうということで、その企画運営を平サロンで行うことになった。

街なか平サロン、旧釜屋の企画運営を通して感じたことは、一箇所でも何をやっていても駄目だということだ。点と点を結ぶとよく言われるが、点と、もう1つの点について企画するということが大事だと感じた。例えば先週、3箇所同時に美術展

を開催したが、楽しそうに移動するお客さんの反応を見ることが出来た。点在する点を結ぶためには同じコンセプトを持って仕掛けていかなければならない。

いわきでは現在、駅前再開発事業を行っており、駅前が大きく変わっている中で、そこがトータルに点在する仕組みや仕掛けをコーディネートできる機能を持っていかなければならない。点が面になっていくことで、歩いて暮らせる、歩いて楽しいまちになっていく。

いわきでは、福島市で既に取り組みされている屋台村の話が出ている。地域資源を活かした、いわきならではのものを屋台村で提供していきたいと考えている。民間、商工会議所、行政の協働をどうやって進めていくかが課題だ。

平サロン倶楽部は芸術文化から活動が始まったが、いつの間にかまちづくりに関わってきた。その一つにコロケコンテストがあり、すでに2回実施した。この流れを屋台村に活かしていければと考えている。

平サロンはまちづくりで独自のポジションにいるが、組織的には非常に弱い。しっかりした体制づくりが持続可能な取組みにつながっていく。

【パネリスト】

「アネッサ」という言葉は会津の方言で「お嫁さん」のことを「あねさま」といい、これをもじってアネッサクラブをつくった。

アネッサクラブのロゴマークは全国から募り、110件ほどの公募から選んだ。

アネッサクラブのそもそもの設立は、今から12年前、野口英世青春通りが立ち上がる時に、モール化の話があり、これを経済効果に結びつけるために、商店街、行政、コンサルタントと意見交換した時に、お店を売る人も買い物する人も女性だから、女性の意見を聴きたいということで集まったのが平成8年の11月だった。

当時、後にアネッサクラブの初代代表となる、いわき出身の山口氏が、家にある骨董品を商店街のウィンドウに展示し、商店街を美術館のようにしたら良いのではないかというアイデアからアネッサクラブの活動が始まった。

アネッサクラブは発足から昨年で10周年を迎えた。現在の会員数は約100名で、活動の場は会津若松駅から野口英世青春通りまでの約1.5kmの7つの商店街となっている。

基本活動としては、商店街を美術館にするという軒先ギャラリーと4つのどうぞを実施している。

【コーディネーター】

福島市の本田氏に質問するが、会社を作り、一人100万円が出資して基本財産をつくったという話があったが、一人100万円出資するところまで機運が高まった理由は何か。また、この会社では、どうやって意思決定をしているのか。

【パネリスト】

平成3年頃から6年まで有志で勉強会を行ったうえでまちづくりセンターを設立したわけだが、出資者である商業者の中に全体を引っ張っていくリーダーがいた。まちづくりへの想いをコアメンバーが共有して出資をした。

出資金は地元金融機関から融資してもらうなど、無理がない仕組みも用意していた。当然、中小企業なので、一括で払えるところは少なかった。

また、平成9年頃から景気は冷え込んだが、まちづくりセンターの設立時である平成7年頃はまだ経済状況は良かった。流れとタイミングが良かったと言える。

会社の意思決定については、株式会社の取締役会で行っている。代表者は市長や商工会議所の会頭等ではなく、民間の方をお願いしている。

【コーディネーター】

今の話の中で、引っ張っていくリーダーがいたという点と、熱い想いがあったという点に関して、みんなで共通にここを目指そうという、ここという部分はどのような表現を用いているのか。通常、個々の経営者にとって、まちのために100万円を出すということは相当の覚悟だと思う。

【パネリスト】

その時の発起人は、商店街連合会青年部で長年、人的なつながりがあった。また、複数の商店街が6年間協同でイベントを実施していた。この二つのネットワークがあり、会社の設立へとつながった。

【コーディネーター】

芸術文化という取り組みから、まちづくりにつながったという話だったが、現在の運営について、平サロンではどのような点で苦労しているのか。

今後、他の団体との連携について、どのように考えているのか。

【パネリスト】

平サロン倶楽部では、街なかコンサートや朗読会、公演等、いろいろな取り組みを行っているが、全て入場料をとっている。料金は500円から2,000円でやっている。これを原資に、わずかだか出演者にお金を払っている。お金を払うことで出演者の意識が変わり、質が保たれる。

運営という点では非常に厳しい。家賃、人件費、光熱費を払っているが、本当に辛い。平サロン倶楽部では、様々な事業を受託し、そこから運営費をひねり出している。

他の団体との連携という点では、むしろ新たなNPO法人を自分達で立ち上げようとしている。いわき国際交流情報センターというものを作り、そこでいろいろな国際交流に関する事業を行い、平サロンとの連携の中で運営費を出していきたい。これは4月1日に発足予定であり、早速4月3日からオーストラリアのホームステイを受け入れる。やりっぱなしの事業にならないようにしたいと考えている。

【コーディネーター】

アネッサクラブは当初60名の会員だったが、現在100名に増えたということだが、会員数をどうやって増やしていったのか。

【パネリスト】

なるべく多くの方に賛同してもらいたいということで、会費を500円から始めたところ、口コミであつという間に会員数は100名を超えた。最盛期には会員が120名余りだったが、神明通りや七日町通りでは独自に婦人部を立ち上げ、アネッサクラブから独立した。現在は100名で落ち着いている。

アネッサクラブでは基本活動と主催活動がある。基本活動では軒先ギャラリー、花と緑のストリート、4つのどうぞ(椅子をどうぞ、お茶をどうぞ、お荷物どうぞ、トイレをどうぞ)、アネッサ十日市等を行っている。

主催事業では、オープンセミナーのアネッサ大学を開催している。これは地域の人と一緒に勉強したいということで、その時に関心のあることを勉強している。最近では、例えば空き店舗対策や、夜の賑わいづくり等を勉強した。

また、はいからさんに会える街を年に2回、歩行者天国と併せて実施している。昨年からは、はいからさんの語り部学校を始めた。これを出張講座としてもやっていきたい。その他、さっしりませパレードを行っている。

【コーディネーター】

新しいまちづくりセミナーということで、最後に、自分にとってまちづくりとは何かを語ってもらいたい。普段の活動では、しなくてもいい苦勞をし、軋轢もある中でがんばっていると思う。それぞれの方にまちづくりへの想いを話して欲しい。

また、こういうふうにするとまちを歩く人が増えるのではないかというアイデア、夢を話してもらいたい。

【パネリスト】

まちづくりは何かということだが、今まで中心市街地の問題に取り組んできて、住みやすさ、暮らしやすさが大事なのではないかと考えている。そういった環境を作っていく中で、商業が張り付き、そこで活気、賑わいが出てくる。商業対策だけ

でまちづくりを考えていくのは難しい。

歩いて暮らせるまちづくりは非常に長い時間かけて、構造を変えていかなければならない。しかし、長い時間をかけているとまちが死んでしまうので、バランスをどうとるかというところが難しい。

福島市の商店街の歩行者通行量は20年前の約半分になっている。商店はそれぞれがんばっているものの、中心市街地のマーケットが今のままで存続できるのかという厳しい状況にある。

そのため、即効性のある事業を思い切って実施していかなければならないし、一方で、郊外部の居住者と中心市街地の居住者のバランスをとっていくための住宅政策など、息の長い取り組みも必要である。長期的な展望を示しながら、短期的な目標を明らかにするということが重要だ。

また、公共事業と民間事業をうまくリンクさせ、うまく民間の投資を刺激していく必要がある。そのために情報を共有化していくことが大事になってくる。

本日のセミナーを通して、マーケティング戦略と、地元の人が根を張ってやる活動、言わば収益事業と非収益事業の双方を実施していくことが大事だと感じた。

【パネリスト】

日本のまちは道路沿いに発展していく傾向がある。道路が混雑することでバイパスをつくり、そこに大型店、ニュータウンができ、中心市街地が空洞化してきた。

この空洞化した中心市街地をどうするかということだが、従来からまちとまちをつないできた公共交通機関をもっと便利なものにするということを考えていかなければならない。車社会と言っても、高校生以下の子供達は車を運転できず、自転車や公共交通機関で移動している。いわきには大学が2つあるが、公共交通機関が不便なため学生は街なかに来ないようだ。

全ての人が車を使っているわけではない。公共交通を活かすまちづくりを考えていくことで、持続可能な歩いて暮らせるまちづくりにつながるのではないだろうか。

また、魅力的なまちを作っていくためには、情報の発信が必要だ。平サロン倶楽部ではワークショップを開催し、子供達の手作りによる、街なかのイベントを紹介する情報誌をつくった。これを、毎月6万5千部、新聞折り込みで配付している。

【パネリスト】

まちづくりは文化であり、人であると思う。そして、そこにまちができるには理由がある。会津は城下町として形成、発展してきた歴史があるので、地域の特徴を活かしたまちづくりを今後も心がけていきたい。

文化の継承が大事だと考えている。例えばかんしょ踊りについては、復活させて来年で10年目を迎える。文化を継承していくためには人材の育成も大事だ。

アネッサクラブは会員100名もいるが、会員の意識に温度差がある。商店街として何をやるのかということは今後も考えていきたい。会員の意識を高める方法には現在模索している。

まちづくりは、居心地のいい空間づくりであり、人の生き甲斐づくりである。今後、自分自身が楽しいと感じるまちづくりを進めていきたい。

【コーディネーター】

それぞれの地域ですばらしい取り組みが実施されている。ぜひこれからも発展していってもらいたいし、会場にいる人も参加してもらいたい。

本日出た事例に限らず、全国的にまちづくりが取り組まれているが、個々の取り組みが連携していないという問題がある。再開発事業でも、ソフト事業でも、個々のプロジェクトとして民間ベースの事業は重要だが、単発的にならば、まちの活性化にはなかなかつながっていかない。

中心市街地に対する民間投資が全体的に落ちている中で、民間が安心して投資が出来る環境整備として、財政の伴った、年次計画が立てられている行政のマスタープランが必要だ。マスタープランの策定により、まちづくりが効果的に、包括的に取り組まれ、まちの活性化につながる。

「不都合な真実」の中で、ゴア元副大統領が、地球温暖化は政治ではなく、モラルの問題だと言っている。中心市街地の問題についてもベースはモラルの問題であり、まちの使い方、まちへの情熱の問題である。まちを大事にする人、まちに熱い想いを持った人が多いまちは変わっていく。

予定の時刻を過ぎたので、最後の質疑は行わない。何かあれば事務局に問い合わせを欲しい。